原　著　麻布大学雑誌　第 13・14 巻　1 － 10

# ジョルダーノ・ブルーノを巡る考察

*Consideration of philosophical thought of Giordano Bruno*

石井　康夫

麻布大学獣医学部基礎教育研究室、神奈川県相模原市淵野辺 1-17-71

Yasuo ISHII

Laboratory of Basic Education, School of Veterinary Medicine, Azabu University, 1–17–71 Fuchinobe, Sagamihara, Kanagawa 229-8501, Japan

**Abstract:** The Renaissance is the age when philosophers and theological scholars developed their own philosophical thoughts and views of the world. This age was also one of religious revolution, which led to serious persecution of some of those philosophers. Petrarca and Pico dera Mirandora were humanists who thought that the thought of Platonic "anima" which potentially exists inside the spirit of each human was attributable to human dignity. It is certain that "anima" is one of the most consequential themes of philosophers and artists of the age. While this idea originated with Aristotol and Platon, Italian humanists explicated it and transformed its definition through the explication by Averroës. Particularly, Pietro Pomponazzi supposed "anima" was not infinite, and developed his own theory based upon exact experiences and rational reason. His thinking, which resulted in the fundamental methodology of Western science, was inherited by Galileo Galilei and other scientists.

Theology was also developed by scholastics which defined infinite deity. Thomas Aqcuinas or Nicolaus Cusanus regarded the Absolute as infinite "esse". This idea of infinity affected Giordano Bruno who considered the universe to be infinity, an absolute infinity beyond human perception. Although his view of the world was regarded as totally unorthodox, the idea of "infinito" was gradually accepted by all men of the next generation. Bruno's philosophical thought played an important role in the division of religious faith and philosophy.

**Key words:** Giordano Bruno, infinito, anima, Renaissance, humanism

## 1. ベケットとブルーノ

Samuel Beckett（以下ベケット）は 1930 年にジョイスの進行中の作品についてエッセイを書いている。その中で彼は 3 人のイタリア人を軸に独自の論を展開した。ダンテ、ブルーノ、ヴィーコである。ベケットは当時の進行中の作品、*Finnegan's Wake* に対してこれらイタリアの詩人、思想家、歴史学者の理念を適用しているわけだが、実際にはむしろ自己の作品にこそ彼ら古き時代の思想は応用されているといってよい。ブルーノの対立物一致の概念をヴィーコ（Giambattista Vico, 1668-1744）の歴史哲学に適用する。対立物の一致ということから、誕生と死、成熟と腐敗、発展と崩壊、個人性と普遍性などの事象をヴィーコの理性的歴史哲学の中で捉える。唯物的でもなく、形而上的・超越的でもなく、詩学と芸術に文明の根源の一端を見出そうとしたヴィーコの理性的歴史観をジョイスの歴史的時間軸に選択、適用したところに彼の趣向が現れているといえる。もっともこれはヴィーコの考えをジョイスの作品の道具とし

て想定しているのではあるが。

その中でベケットの考えるジョイス作品の人間像とはどのようなものであったか。それはジョイスが*Dubiliners*以降一貫して描いてきた、西端の小都市アイルランド・ダブリンの民衆を基盤に、20世紀の神なき摂理の世界の中で、成就することのない生を生きる現代人である。都市空間において半ば麻痺的状態の中で日常生活に埋没する市民の描写は、モダニズムアートの1つの典型ともなっている。ベケットのジョイス作品に対する視点は、単に20世紀初頭の欧州文学の中での位置づけにはなく、ダンテ・ルネサンス以降のヨーロッパ文化圏全体の歴史文化史的世界観の中での捉え方にあったといえる。ヨーロッパの精神世界の中心である絶対者の存在がここでは否定される。絶対者が不在である以上、一切の成就が不可能であり、人は中途半端に浄罪されることになる。そのような揶揄される罪人的人間像というのはベケットらしい捉え方であるが、翻弄される人間を包む歴史について、ヴィーコの蓋然性を持ち出し、かつ歴史観を適用するのはさらにベケットらしい選択といえる。ダンテ、ブルーノからヴィーコという系譜を結び付けることによって、その神話的・キリスト教文化観と西洋近代から現代にいたる世界観を網羅しようとしたベケットは、その神話的詩学観の線上でジョイス世界を位置づけようとした。ベケット自身の哲学との接触はデカルトに始まった。彼がヴィーコに傾倒したのはヴィーコが近代合理主義より蓋然性に重きを置いた故であるとも考えられる。決して安定することのない、思惟する主体者、言葉を発する主体者のイメージはむしろデカルトの反対の位置にある。デカルトに対立するヴィーコという構図が拭えないのは、ヴィーコが蓋然性を強調したためであることはよく知られている。成就なき世界というのはジョイスのみならず、ベケット自身の世界観の根底にあるのではないか。ブルーノの対立物一致の概念がヴィーコに正確に適用されるかどうかはともかく、ロマンス語・イタリア文学に精通していた若いベケットが、ダンテやペトラルカから影響を受けていたことは容易に想像がつく。ベケットとジョルダーノ・ブルーノの間にはどれほどの関係性があるか。このイタリアの思想家についてベケットが引用した理由は、ジョイス論をイタリア系の歴史的系譜の中で位置付ける必要があったためであろう。ベケット自身がブルーノという人物とその思想世界に関心を抱いていたからであろうか。ブルーノの思想的解釈や思想史における位置づけは既に多くが論じられているところである。ここではベケットと切り離して、イタリア・ルネサンスの思想的背景の中で再考察することが必要である。ブルーノの思想形成については、同時代的な精神史の潮流を概観しなければその意義が明確にならない。以下に彼の世界観に至るまでの思潮的背景を包含しながら考察を展開するものとする。

## 2. ブルーノをめぐる時代的背景

ジョルダーノ・ブルーノ（Giordano Bruno 1548-1600）が生きた時代とは、日本では戦国時代後期に相当する時代である。足利家による室町体制が崩壊し、近世を開く江戸幕府体制構築に向かっていく時代と考えることができる。ヨーロッパにおいては中世的封建体制が崩れ、14～15世紀にかけて、その政治・経済社会的、精神的統一支配からの脱却を図ろうとする趨勢にあった時代に相当する。ルネサンスとは後の表現（ブルクハルトによる）であるが、1600年というと既そのルネサンス後期にあたるといえる。特に精神世界の動向としては、ヨーロッパ全体に浸透していたキリスト教旧教が、新教も含めたあらゆる新しい思潮の波に対峙せざるをえない時代でもあった、つまり宗教改革が進行中の時代であり、ドイツ・スイス地方での新教の勃興はもとより、旧教内部でも改革を迫られていた時代でもあった。エラスムスは新教派ではなかったが、カトリック改革を促す批判改革論者として著作活動を行っていた[1]。そのような精神世界が激しい交錯をめぐらす中で、新生や復興を意味するルネサンス期の思潮において、急激に世界観が突然変化したわけではない。むしろその表現が呈するような明るいものではなく、思想・世界観においてはまだまだ異端審問・迫害が続く時代であったことは認識する必要がある。ギリシア・ヘレニズムの哲学・美学が推奨されたルネサンス期のイタリアにおいては、可視的な芸術世界のみならず、プラトン、アリストテレスを基幹とするギリシア由来の異教的・精神的・科学的思潮が影響力を持って噴出した時代であると考えられる。つまり宗教改革のみなら

ず、観念論と自然科学が分離する契機を見出そうとしていた時代的混迷期である。そのような哲学的イデオロギーと宗教が錯綜する中、その1600年2月17日、一人のイタリア人、ノラ出身の修道者にして哲学者である人物が邪宗徒として生きたまま焚刑に処せられた。ブルーノその人である。時の体制から考えると彼の思想は異端であり、死に値する「罪」であったことは言うまでもない。彼に提出された異端事項24項目の内、実際彼が肯定、主張したとされる2項目が焚刑の理由である（それ以外は若干認識したもの、該当しないもの、彼自身否定したものであったという）その2項目とは以下の通り：

・世界の多様説と永遠説を支持したこと。
・輪廻説を信じ、人間の霊魂が動物にも移り住むと信じたこと。[2)]

清水氏の研究によれば、ブルーノが問題となったことは、あくまで哲学的問題であり、信仰の問題ではなかったことである。信仰においては彼は自説を捨てたという。哲学においては自説を曲げなかった。

彼の哲学への殉死という一貫した姿勢は、キリスト教プロテスタント、もしくは西洋近代の思潮に大きな影響を与えたということは言うまでもない。それが恰もキリスト教旧教観もしくはローマ法王庁への決然たる反動弾圧の象徴的通念として浸透していったことは認める必要はあるだろう。勿論カトリック正統教義からすれば彼の異端粛正は当然のことであり、厳格なる教会規律の厳守が使命であった当時のベルラルミーノ枢機卿からすれば、それは彼の信念の遂行であった。ほぼ同時代人であったトンマーゾ・カンパネッラ（Tomaso Canppanerra 1568-1634）は改革的ユートピア思想を展開し、やはり異端として捕縛された。しかしカンパネッラは度重なる拷問にも耐え、狂人を装い、自説を曲げてでも生き延びた。ブルーノとは対照的である。当時のイタリアはローマ教皇庁を抱えていることもあって地理的にも審問の対象者を捕縛しやすい環境にあった。同時代人としてガラテオ、フォンツィオなど焚刑に処せられた者については枚挙にいとまがない。ポーランドで布教活動を行ったソツィーニはこの頃の亡命者である。

ルネサンスの精神的運動はイタリアより始まり、ヨーロッパに浸透するに際して北上していった。このイタリア・ルネサンスの発展を導いたものは、地中海貿易であり、それを経由した東方からの人と技術・物流であったことは言うまでもない。1096年の十字軍遠征開始以降イスラム圏とは敵対関係にあったヨーロッパではあるが、経済上の需要供給システムはまた別として動いていた。都市が海洋に面していたイタリアはその重要な拠点となった。東からは更にビザンチンから入ってきたギリシア・ヘレニズム文化の流入もある。東西に分裂したローマ帝国の内、ある意味では伝統性を喪失しなかったのは東ローマ帝国であり、古代ギリシアの流れを受け継ぐ意味でも「復興」というヨーロッパ文化の源泉の再評価というルネサンス運動に対して、東ローマ帝国という遺産の継承はイタリア・ルネサンスには大きな影響をもたらすことになる。折しも1453年のオスマン・トルコのビザンチン攻略が拍車をかけ、人と遺産がイタリアに流れてきた。皮肉なことに西ローマ帝国の宗教観が自国の異端者を迫害したことで、イタリアの知識人たちは殉教者として自ら命を絶つか、亡命するしかなかった。亡命できるだけの経済的余裕のある者はまだ良しとして、ほとんどの異端的思想の持ち主は祖国や故郷を捨てて他国に流れていくだけの余裕はなかった。当時ニコデミスムという生き方が流行したことは、人心が価値観の相克に苦しんでいたことを如実に示すものである。（ニコデモスとは内心イエス・キリストに傾向してはいたが、その処刑に立ち会ったユダヤ人官吏の名前である。）死を選択しえない者は、敢えて魂の二重生活を強いられることとなった。信仰という本来の純粋さが恐怖政治に支配されることとなった、それがルネサンスをめぐる宗教的実情でもあった。

また、思想信条というよりも、政治的反動により焚刑に処せられたものもいる。フィレンツェのドミニコ会修道士サヴォナローラ（Girolamo Savonarola 1452-1498）はその例である。メディチ家による繁栄を一種の堕落と見なし、徹底した悔悟を強要する彼の戒律主義的姿勢は一時は支持を得た。しかし当時のイタリアは統一国家ではなく、フランス・スペインによる外国勢力の脅威にさらされていた、自治都市を中心とした小国（ミラノ公国、ナポリ王国、教皇領、シエナ・ジェノバ・フィレンツェ・ヴェネツィア共和国など）の集合体でしかなかった。宗教改革とは別な意味で、サヴォナローラは外国勢力に屈した罪を着

せられることとなる。彼の場合、強烈なストイシズムが逆に市民の反感を買うことになった。このことは、既に宗教的教義だけで発達した市民階級を容易に先導していくことは困難な情勢にあったことを示す。西洋世界は、メディチ家のような資本家の台頭、北海・大西洋に拡大する経済貿易圏の発達により、中世的価値観の激しい揺り戻しがあったとしても近代化の波は着実にその勢力をつけてきたといえるのである。

1517年に贖宥状批判を行い、信仰至上主義を唱えたルター（Martin Luther 1483-1546）が比較的安全であったのは、教皇領からの遠隔地であったという地理的要因も含め、ザクセン選帝侯フリードリヒの擁護もあったためである。カルヴァンらによる新教の勢力も暴力とは決して無縁なものではなく、1648年のヴェストファーレン条約で一応の決着が着くまで政治的・宗教的対立と弾圧の図式はヨーロッパ全土を覆っていたといえる。そのような時代的背景の中で異端認定が成されてしまうということは、その個人にとっては社会的に生存する可能性が極めて低かったといわざるをえない。ブルーノはルネサンス後期に属する人間ではあったが、自らの意思を貫くという茨の道を選択した。彼自身実は楽観主義的なところもあり、追及されていながらも亡命先から故国へ帰ることとなる。捕縛されることは自身にとっても明らかであったはずである。1592年ヴェネツイアで連行され、翌年1593年より7年にわたりローマで異端審問にかけられた後、ブルーノは焚刑となった。ルネサンス期という激動の時代背景で彼が構築した思想とはいかなるものであったか。

## 3. ルネサンスの思潮について

### a. Infinitoの概念とスコラ的神学

宇宙が無限（infinito）であること。現代からすれば特に問題となることのない考えである。宇宙に対する造詣の有無に関わらず、また個人の思想信条にかかわらず、宇宙が無限であることの思いは、今日ではごく自然の表現の1つであると言える。ブルーノの時代ではそうではなかった。ブルーノは宗教改革の時代で生きながらも改革者ではなく、また修道士の身の上ながら純然たる宗教家ともいえなかった。彼はむしろ時代の宗教的価値観に厳然と対峙しようとした思想家であったと考えられる。

無限という言葉が感覚的にもたらすものは何か。無限を主題とした同じイタリア人のレオパルディ（Giacomo Leopardi 1798-1837）の詩を想起することは自然なことか、あるいはロマン主義的感傷から喚起されるものかはともかく、実は「限りがないもの」を想う感覚とは、人間にとって非日常的なものとも考えられる。

L'infinito

Sempre caro mi fu quest'ermo colle,
E questa siepe, che da tanta parte
Dell'ultimo orizzonte il guardo esclude.
Ma sedendo e mirando, interminati
Spazi di là da quella, e sovrumani
Silenzi, e profondissima quiete
Io nel pensier mi fingo; ove per poco
Il cor non si spaura. E come il vento
Odo stormir tra quete piante, io quello
Infinito silenzio a questa voce
Vo comparando: e mi sovvien l'eterno,
E le morte stagioni, e la presente
E viva, e il suon di lei. Così tra questa
Immensità s'annega il pensier mio:
E il naufragar m'è dolce in queto mare.

無　窮

この寂しき丘こそわれにはつねに懐かしき
また遠き地平線のかなたの眺めを　わが目に
さえぎるこの生垣も。ここにたたずみ眺めつ
つ　果てなき空漠にわれは思う　この世なら
ぬ沈黙と深きふかき寂漠を。　かくてわが心
恐れふるう　なお枝の間をゆるがす風の如く
　無限の沈黙をこの音になぞらえつつ　われ
は夢む、永遠と死にたる歳月を　またうつし
よのこの瞬間と　この音のいかにひびくかを。
　涯でなき万有の中にわが思いは沈みこの海
に難破せんこそ　われにはこよなくうれしき[3)]

イタリア・ルネサンスにイタリアロマン主義の詩人の表現を借用することは感傷の故だけとはいえまい。無限と永遠という自然の幽玄の中で、魂の深遠を歌い上げるレオパルディの言葉は、時代を超越して

共通する感覚である。魂の静謐は単に虚無と憂鬱に沈み込むことなく、広漠かつ永遠の自然と、人間の理性との狭間で沈潜する。ここでの無限の宇宙は、無論この憂鬱の詩人の漂白を包む世界に他ならず、それこそ感傷へ追いやる万有の世界でしかない。この無限をブルーノの無限と並べることは見当違いである。しかし無限という言葉がもたらすイメジャリーには、それが感傷であれ哲学的世界観であれ、知覚を超越する深淵が内在する。実際に無限というものは感覚的に不可能であるからだ。無限という言葉の観念の根源は、ブルーノにおいてはレオパルディよりも200年以上前に遡らねばならない。

「形而上学」の中でアリストテレスが述べている無限の概念を考えると、無限というものの根本的な不可能性が浮上する。アリストテレスには形相の存在が根底にあり、現実態における可能性という問題が常に存在する。無限なるものを仮定すると、数的、空間的にその分割、または極大の不可能性が生じる。可能的には数の分割、または増大は存在するが、形相としての無限の実体が現実態として伴わない限り、無限の概念は否定の方向に向かわざるをえない。もともと現実態としての形相の存在が始原・原理として捉えられている以上、それを超越する概念を設定することは可能なかぎり無理があるのである。しかもアリストテレスの考えるところの宇宙は有限の空間である。究極有限の宇宙において無限の広がり・極大は想定することはできない[4)]。一方で宇宙の形状はアリストテレス—プトレマイオス的世界観が適用されるが、他方、中世スコラ哲学においては宇宙が神として無限的絶対者として想定される。

トマス・アクィナス（Thomas Aqcuinus 1225-1274）が『神学大全』（*Summa theologiae*）第2部までを著したのは1272年のことである。アリストテレスを解釈し、神が「在る」ことの証明をしてからアクィナスは神の無限について説く。神は”“infinitus et perfectus”無限にして完全と捉える。アクイナスは神の形相を知性で理解する可知的な形相であるがために現実態における無限は可能となる。アリストテレスの形而上学において、根源的に事物は“ある”（=ens）ことが前提である。存在基底にある概念として元（はじめ＝principium）、限り（きり=finitum）、不可分なる1つのもの（=unum）などが挙げられるが、この形相と質料の存在がアリストテリスムの思想を支えるものの1つであり、この命題は西洋哲学においては実存論と結合し、20世紀にいたるまで存在論の核になる理念と位置づけられることとなる。トマス・アクィナスにおいて、神の存在はその本質との合一性を兼ね備えたものとして定義づけられる。神ありき＝“esse divinum”の内に捉えられるものは、形相・質料の現実態としての本性が、存在することにおいて可能態として完全性を有することになる。しかしながら、この存在は現実態においては不可知の領域にある。神の無限性においては、本質と存在が一致する神のみにおいて、その無限が可能となる。「本質において無限なるもの」＝“infinitum per essentiam”という概念は神だけに適合される定義となる、ここがアリストテレスの有限性を超越するアクィナスの神の無限論になる[5)]。

時を経てニコラウス・クリュフツ（Nicolaus Cusanus クザーヌス 1401-1464）は、このスコラ的神の無限の概念を、より無限を強調する解釈を根底に展開することとなる。クザーヌスにおいては、神の存在は三一の合一性が何よりも原理として尊重されなければならないとする。また神の完全なる存在においては、その無限の相当性をもって存在することが証明される。ここまではアクィナスとそれほど相違はない。クザーヌスの論点の特徴は、何よりもその無限の解釈にある。彼による無限とは、無限の始まりと無限の終わりをもって神は存在するが、この始まりも始まりなき始まりであり、その終わりも終わりなき終わりである。というのも無限においては質量・数においていかな尺度も適合しえないものだからであり、最大も最小もない完全な無限として解釈されるに至る。無限の概念の中で極大と極小が相当性を持つにいたるという意味で、対立物の一致が見られることになる。アリストテレスの有限的宇宙観は、一見クザーヌスにおいては「限り」が存在しなくなることにより無限の神による被造物に変わるようにも思われる。しかし、ここで注意しなければならないのは、クザーヌスは三一致による神の一性、その無限性を強調しようとしたのであって、決して天文学的に宇宙の無限の概念を展開したわけではない。彼はむしろ徹底した信仰主義者であり、神の存在の純粋なる尊重者であった。その意味で神を称える表現者としてのクザーヌ

ス評価に結びつく。ルネサンス期に生きた修道者としてクザーヌスは無限の神の厳然たる存在性を提唱しようとしたのである[6]。無限という言葉が後世に彼の思想的概念の特徴として指摘されているわけだが、むしろ強調されるべきは彼の信仰心の純粋さ、ひたむきさにあると言える。ただし、中世における宇宙観を支配していた、アリストテレス―プトレマイオス的な宇宙の有限性の概念に対して、アクィナス的観点からも無限に力点を置いた思想を打ち出したことは認識する必要はある。アクィナスの知的認識による神の可能態における存在性が、始原なき、終焉なき無限の一性という存在に捉えられることにより、ルネサンス的世界観の改革とも融合することにより新たな世界観への継承的役割を果たすことになったのである。

b. ルネサンス的ヒューマニスム、ポムポナッツイ的合理主義

イタリアに始まるルネサンスの思潮については多くが論じられている。ブルーノに関わる、ブルーノの哲学的思想に影響を与えたと考えられる思潮についても既に相当の研究がなされている。ここではブルーノによる宇宙の無限に至るまでの思想的背景を再確認し、その意義を考察する。

前述のとおりルネサンスはヨーロッパ文化の再確認の時代であった。中世的世界観と宗教改革が進行し、古代ギリシャ的文化観を再認識することにより新たな人文主義が産出されようとする時代であった。それゆえに美学理念に基づいた芸術が発展し、特にイタリア自治都市を中心とした市民社会の発展により、資本家による芸術の振興が促進されたことは紛れもない史実である。芸術、特に西洋絵画における発展には目覚しいものはあったが、それらの根底に流れる精神性は何よりも価値観の変革にあった。

ヨーロッパ精神の新たな創造をもたらしたものは、イタリア諸都市、特にフィレンツェやピサ、パトヴァ、ナポリなどの都市が輩出した新しい価値観を持った知識人であった。フランチェスコ・ペトラルカ(Francesco Petrarca, 1304-1374)は詩人としての思想的根源を古典に見出そうとした。彼にとって重要な問題は人間の心であり、人間性の本質を捉えることが最重要課題であった。この心(霊魂 =anima)への取り組みは、スコラ的宗教的教義に囚われることなくより自由な人間精神尊重の方向性を持って研究された。これにより、イタリア人文主義が開花していったことは既に明白なことである。霊魂論は古典のプラトン神学へと回帰され、マルシリオ・フィチーノ(Marsilio Ficino, 1433-1499)やジョバンニ・ピコ・デッラ・ミランドラ(Giovanni Pico della Mirandola, 1463-1494)などの、いわゆるヒューマニストたちの人間精神研究の根本課題として継承されていくことになる。

フィレンツェ・プラトニスムを発展させたフィチーノは、人間の霊魂と神の神性との関係を追求した思想家であったといえる。至高善である無限者＝神と、自由意志を持つ人間存在の霊魂との関係を結びつけるものは、その人間霊魂に内在する神性に他ならない。無限者の至高善を享受することが、到達可能となる神の道への永遠不死となる理性的霊魂の神性を示すことになる。しかしフィチーノのこのような考えは、人間存在を世界の中心に置くことによって神の善性・至高性と楽観的に結合させようとしている趣があると解釈される危険性はあった。人間の本質を道徳・倫理的に理性的善と定義し、その神性に光を照射することは人間中心主義的思想を展開する上では必要不可欠なことであったであろうが、その楽観論的な理念は、継承者であったピコにおいても冷静に批判されることとなった。

ピコ・デッラ・ミランドラもプラトン主義思想の継承者の位置にあった。彼を最も著名にしたのは『人間の尊厳についての演説』(*Oratio de hominis dignitate*)であった。人間の尊厳(Homnis dignitate)という言葉に表れているように、ピコの哲学は人間存在の本質を顕現させることにあった。しかしピコは、フィチーノのような不死の霊魂を備えた人間礼賛の方向には向かわず、人間とはむしろ神には到達できぬ個々の被造物でしかないとする。無限者である神とは決して近接しえない存在であり、現実態においても存在はない。従って万物を照射する光もピコにおいては感覚されえぬものとされる。しかしながら、人間は他の被造物とは異なり、摂理の中で本性が限定されたり、予定されているわけではないとされる。人間存在は万物の根源であり、万物を包含する神の下で、万物の中心として自由意志を持ったミクロコスモス的存在者として万物を萌芽させる可能性を有するものと

考えられるのである。ミクロコスモスである人間は自由者であり尊厳を有しているという点で中世的な価値観・世界観とは大きく異なる。動植物に内在するような決定付けられた本性を持たない人間は、その自由意志により堕落することもあれば昇華することもできる。一方で人間批判をしつつも、他方人間性の豊かさを主張したところにピコの思想が広く受け入れられ、ルネサンス人文思想の中核的役割を果たした正当性があったと考えられるのである。

人間の心＝霊魂に中心を置いたプラトニスム的思潮の一方で、むしろアリストテレス的霊魂論からルネサンス思想を発展させた流れもあった。

アリストテレスの解釈者であったイブン＝ルシッド（Ibn Rushd, ラテン名アヴェロエス Averroës）は霊魂は二種類あるとした。永遠不滅の普遍的霊魂と、個々の人間の肉体と共に死滅していく可死的な霊魂である。前者は信仰の真理を示し、後者は理性に基づく哲学的蓋然的真理を示す。神の信仰は絶対であるがゆえにこれは不死的霊魂としたが、人間個々人の肉体の死後にはそれに伴う霊魂も死滅してしまうというものであった。しかし個人の死後の霊魂の死滅という考えは、死後の救済というキリスト教本来の考えからは大きく離反することとなる。アヴェロエスのこの二重真理説は 1277 年には異端視されることとなるわけだが、信仰と思想を分け隔てるという概念は、自然科学の領域にいる者からは異端と考えられるというよりもむしろ客観的事実と経験を重要視する立場から根強く支持されることとなる。つまりアヴェロエス的思想は信仰と自然科学を二分するという意味において重要な意義を持つことになった。イタリアにおいてはパトヴァやボローニャの大学は医学部や法学部などの実学を中心とした学部構成であった。経験と理性を重んじる風土から宗教と哲学・科学の分断はより明瞭に意識されることとなるのである。ピエトロ・ポムポナッツイ（Pietro Pomponazzi, 1462-1525）はこのようなアリストテレス的霊魂論の解釈を更に発展させ、西洋の自然科学哲学の基礎となる思想を展開させることとなった。フィレンツェのようなプラトニズムが優占するような地場においては、人間中心主義的思想が主観的感性の中から立ち上げられ、人間精神の尊厳が強調され、ルネサンス芸術発達の精神的基盤を構築したわけであるが、パトヴァのような自然科学を中心に発展した都市においては、むしろアリストテリスムの方から哲学が発達したと考えられるのである。アリストテレスからアヴェロスを経由して霊魂論がポムポナッツイによってより合理的に解釈されることとなる。彼の『霊魂不滅論』（*De immortalitate animae*）によれば、アヴェロエス的霊魂の二重性理論のみならず、霊魂そのものの不死性が見直されることとなる。霊魂の可死性を是認することにより（全的な否定ではないのだが）、人間は理性に基づく実践的成就の可能性を目的とする存在になる。そのためには事実と経験を拠り所とする合理主義的思想が人間存在を支えるものという認識に到達することになる。そのような考えは相当の批判を被ることとなったが、ポムポナッツイは異端として迫害されることはなかった。アリストテレスの『霊魂論』（*De Anima*）では有魂なる存在である人間の霊魂は、身体における現実態・形相であるとされる。なおかつ肉体の存在なしにはありえないものであるとある。アリストテレスはこの論の中で霊魂の属性と理性・思惟との関係を解明していくわけだが、むしろ霊魂の定義は、生物である思惟する理性的存在者との関係で解釈されているわけであり、アリストテレスは本来決して霊魂の不滅性を断定しているわけではないのである）。従ってポムポナッツイのアリストテレス的解釈はむしろそのギリシャ哲学の正統性を時代を経て分析しているわけであり、必然的に合理的思想へ向かっていったことになる。たとえ宗教的理念に反したとしても、自然科学的立場から霊魂の可死性を認識したポムポナッツイの考えは西洋の自然科学的合理主義の始原を示唆するものであり、その客観的観察と経験に根ざした合理的精神性はガリレイ等に受け継がれていくことになる。

一方のピコのフィレンツェ的プラトニスム・ヒューマニズムの精神的発達があり、また一方でパトヴァ的アリストテリスム・サイエンスの精神性の発達が存在した。これらはいずれもイタリア・ルネサンスの精神的支柱であり、ルネサンスの北上と共に西洋人文・自然科学の精神的基礎となっていったことは再認識する必要はあるだろう。重要なことはこの思潮の流れの中でブルーノが自己の哲学的思想を育んでいったことにある。いよいよ宗教と科学が分離するという時期にブルーノはラディカルな宇宙観を提示

した。彼は決して緻密な計算や宇宙観察に基づいて論を展開したわけではなかった。その意味ではむしろ神学的考察という観点の上での世界観を展開したといえる。だが彼の場合、その内容は当時の体制から許容されるものではなかった。

## 4. “Inifinito”を巡る考察

ルネサンスを巡る上述の思潮の流れはブルーノの思想形成に大きく貢献・影響したと考えられる。一方でルネサンス的ヒューマニスムが理性的人間の精神を評価することにより、個々人の知性や道徳が尊厳を持って認識されるようになる。また信仰と哲学・自然科学の分離はポムポナッツイによって徐々に促進され、宗教的教義のみが世界観を構築できるものではないという認識が高まり、経験と実践に基づく近代合理主義精神の萌芽につながった。また精神面や実学面での近代化の波がブルーノの考察の発達に拍車をかけていたことは事実である。教皇サイドより異端とされたブルーノは、しかしながら無神論者ではなかった。むしろカソリック的敬神論者であった。ただし三一致の合一性を受け入れられなかったことは彼の立場を決定的に危機に追いやるものであった。彼にとっては神と精霊とキリストの合一性を理解することはできなかったのである。著作にもクザーヌスを称え、一者である絶対的神の存在を認めていたにもかかわらず、天蓋に覆われたアリストテレス的宇宙観を決して受け入れるような人間ではなかった。

ブルーノの人格もまた彼の運命を決定づける要因でもあった。議論を好み、機知により自論に反するものを厳しく揶揄していく姿勢はヨーロッパの諸国で敬遠され疎まれる原因を幾度も作った。その人格は決して穏やかではなく、冷笑的に物事を批判していく類に属するものである。彼は思想家としてだけでなく、喜劇も著した文学者でもあった。版本として27の作品が残されたが、これらの内、「無限」に関わる最も代表的な作品は『原因、原理、一者について』(De la causa, principio e uno, 1584) と『無限、宇宙と諸世界について』(De l'infinito, universo e mondi, 1584) である。この2作品は余りにも良く知られているために、ブルーノの思想というとこれらが全てとされてしまうほどである。確かに宇宙観を示しているという点においてはそのように解釈されている。出版年度は同一であるこれらはいずれも「対話」形式で話しが進められている。それぞれの対話者に役割が課せられる。テオフィロ、フィロテオなどはブルーノの代弁者であり、ブルキオのように反対の意を唱える者、またディクソン、エルピーノはフィロテオの支持者という配置になっている。対話形式は作品を単なる理論書ではなく、むしろ演劇的要素を含んだ文学書として読むこともできる。これはブルーノに文学者としての才があっただけでなく、1つの意見に対し、「理解を得る」目的のためには実に様々な人間同士のやり取りを経るという実際的な効果が表れている。

無限の概念は、『原因、原理、一者について』の第五対話において明確にテオフィロによって口述されることになる。「宇宙は一であり、無限であり、不動です。絶対的な可能性は一であり、現実態は一です。」[7] 『無限、宇宙および諸世界について』は宇宙観の考えを更に詳細に発展させた対話集と考えることができる。ここでブルーノの代弁者フィロテオは、神の無限と宇宙の無限を二分する発言をしている。神は全的に無限であるが、宇宙は全的に無限というわけではなく、全体としての無限である、というものである。無限という概念それ自体が不可分にして比量することも不可能であり、また感覚知を超越した一として捉えられている[8]。神の存在も同様に無限であるが、宇宙の無限と神の無限とは同一ではない。敢えて二分したのは、神が万物に無限に遍在する全能性を有し、いかなるものにも属性を示すことのない超越性を有するからであるとする。一方の宇宙もまたいかなる尺度も適合しえぬ延長性と収縮性を有し比量不可能な空間概念にあるものとされながらも、その諸世界に属するものは有限性を持つために全体としての無限と捉えられる。神の無限についてはより高次の存在に位置させることがブルーノ哲学の1つの特徴であると考えられる。またこのことは、ブルーノの宇宙観が、観察に基づく天文学というよりもむしろスコラ的な宇宙観の延長にあるものと考えられる1つの要因ともなっている。しかしブルーノの思想の最大の論点はやはりこの無限空間についての概念であることは明瞭である。いかなる感覚的尺度・数量的尺度を拒絶するところの無限、その中に有限である諸世界が存在すること。アリストテレス的な閉じたエー

テル的有限空間の内に地球が存在し、円周と中心と極とを設定することは不可能であると説く。そのような世界観は中心や極限の存在を前提として展開されているものであり、無限の空虚を認めるものとの思考とは相容れることはない。無限の空無の内には本来確定不動の極などというものは存在しえない以上、地球を含むすべての諸世界・恒星にも固有の半径と中心が存在するならば、逆に言えば地球は絶対的中央にはなりえないこととなる、なぜならば宇宙は一切の上昇・下降運動も存在しない無数の諸世界の拡がりだからである[9]。

対話形式の論の進展は常に対立者との議論を含める。第五対話においては新しい対話者・アルベルティーノが、フィロテオ（＝ブルーノ）、エルピーノ、フラカストリオと議論の後に穏やかに意見の一致を見ることとなる。ブルーノは話者の口を借りることにより自論を対立者に説き明かしていくという技巧を持つ。自説の戯曲化という意味でも思想家であると共に劇作家としての才もあったと言えよう。ベケットがブルーノから演劇的要素の影響を受けたかどうかは定かではないが、その可能性は決して否定できるものでもない[10]。

最終部におけるフィロテオのアルベルティーノに対する言説の展開はブルーノの無限における多元的宇宙・諸世界の存在を決定づけるものである。「世界の境界は、それがいくつあろうと、ただ一つの世界に属する境界ではなくて、この中心にもあの中心にも（それぞれの世界が各自の中心をもっているのですから）関係していることになります。というのは世界の中心はそれに向かいそれをとり囲んでいる領域の到る所に、影響力をもっているのですから。...我々の住んでいるこの星も、その他のあらゆる星も、思い思いの廻転と徘徊を行っているのだからです。こうして動いているものは、無限の諸世界、すなわち数えきれぬ星々であり、この場所は無限なる空間、すなわち星々を包み徘徊させている天なのです。万物がこの地球を中心としてひとしく廻転しているという空想は捨て去られます。」[11] このような思考概念が彼の異端性を立証するものであったが、ブルーノにとってはキリスト教的神の無限の存在というよりも、宇宙全体を司る畏敬の神の存在というものを考慮していたと解釈されている。他のルネサンスの思想家たちも等しく、神の存在を拡大解釈し、宗教的教義に限定されない神を考察していた。時代的ヒューマニスムを発展させる上では新しい精神的秩序が必要であったことの証である。しかしブルーノ以降、宗教上の問題は17世紀においてますます対立の激しさを増す。また一方でブルーノの無限論はライプニッツやスピノザに継承され、モナドロジーとしてバロック哲学の要素と姿を変えていくことになるのである。

ベケットとの関連について。ベケットがブルーノに言及するのはジョイス論のみである。それ以降は芸術論、批評等でブルーノへの詳細な記述がなされたものはない。しかしベケットが彼の世界観を自作で応用していることは随所で想起できることである。特に小説においては対立物の一致という観点から、虚無の意味での極端な極相の一致が見られることがある。それは生成や腐敗、運動と停止、などの要素である。また演劇においては空間的方法論として動く人物・不動の人物、円の中心で動けない人間と円周上の観客、口という一点とそれを巡る空間全体など、人物設定、空間処理において様々な意味で応用されていると推察することができる。果たしてそれらがこのルネサンスの思想家を根源とするものかどうかはともかく、方法論としてベケット作品の随所に見られるものと認識しておく必要がある。ベケットがジョイス論にイタリア・ルネサンスの思潮とブルーノを適用したのは、それが当時のヨーロッパ全体に精神的変革をもたらした象徴的な精神史の動きの1つであったからだ。ジョイスは20世紀において、ダブリンという旧教と英国に支配された辺境から、ヨーロッパ全体に対する古い偏見や価値観に対する変革をもたらそうと考えた。ベケットの言及の理由はそこにあると考える。個別性から普遍性という方法論は自己の作品でも応用されることになったのである。

ブルーノ自身は彼の時代を生き抜き、彼なりの終焉を迎えた。形而上的なテーマ＝神、霊魂、宇宙といったものへの洞察というものについては、今日においてはその取り組みは慎重を要し、誤解を受け易い問題ではある。心の存在の問題はしかし決して無視しえぬ問いである。少なくとも倫理上の心の問題は極めて今日的なテーマと言わざるをえない。ルネサンスの思想家達も別に飛躍した論議を展開してい

たのではなく、あくまで生きた人間の心としての霊魂のあり方を探究していたのである。その意味で世紀を経ても決して色褪せることのない問題である。ブルーノの死後、新旧の宗教上の問題は政治的な問題により増幅され、ヨーロッパにおいては三十年戦争という形で噴出することになる。その凄惨さは1631年のマグデブルグに見られたような残虐無比を極めたものだった。その根源は人間の本性にあるわけで、決して霊魂＝心の問題とは無縁ではない。

## 註

1) エラスムスはトマス・モアやホルバインとは友好的立場にあったが、ルターには共鳴することはなかったからである。実はブルーノがエラスムスの『愚神礼賛』を所有していたことが異端諮問理由の1つでもあった。
2) 清水純一. 2003.「ジョルダーノ・ブルーノの研究」創文社：48-51.
3) 堤　虎男. 1988.「レオパルディ研究」村松書館：62-64.
   レオパルディは極めてロマン主義傾向の強い詩人であるが、ドイツのヘルダーリンと同様に強烈な表現に富んだ詩風である。彼の厭世的世界観がベケットの関心を引いたと推される。悲嘆にくれる表現は多いのは何よりもレオパルディ自身の悲運な境遇に由来するが、無限的感覚・深遠はそのような彼個人の厭世観念に由来するものである。無論哲学的洞察をここで求めるのは無理があるといえる。
4) 川田殖、松永雄二訳. 1979.「形而上学」「アリストテレス」所収　中央公論社：449-454参照。
5) トマス・アクィナス　山田昌訳. 1980.「神学大全」「トマス・アクィナス」所収　中央公論社：117-244.
6) ニコラウス・クザーヌス　八巻和彦訳. 2001.「神を観ることについて」岩波書店
7) ジョルダーノ・ブルーノ　加藤守通訳. 1998.「原因・原理・一者について」東信堂：169.
8) フィロテオ「私に言わせれば、宇宙は全体の無限（*tutto infinito*）です。なぜならば宇宙には縁も終わりもありませんし、これをとり囲む表面もないからです。が宇宙は全的に無限（*totalmente infinito*）なのではありません。宇宙から採り出すことのできるその各部分は有限なものであって、宇宙の中に包まれている無数の諸世界もその一つ一つは有限のものですから。また神は全体の無限（*tutto infinito*）です。なぜなら神は全的に無限（*totalmente infinito*）なるものとも言われます。神は全世界にくまなく遍在し、そのそれぞれの部分の中で無限かつ全的に存在しているからです。」このフィロテオの表現箇所に宇宙と神の無限の区別がなされる。クザーヌスの神の無限性とは異なり、ブルーノはあくまで宇宙の無限性を異なる尺度で定義しようと試みた。
   ジョルダーノ・ブルーノ　清水純一訳. 1982.「無限、宇宙および諸世界について」岩波書店：383.
9) フィロテオによる地球中心主義への批判。「無限、宇宙および諸世界について」91-93.
10) ブルーノの喜劇の代表作は「燈火を掲げる者」（Candelaio 1582）がある。痛烈な批判精神に満ちた、冷笑的な笑いの要素はベケットに通じるものがある。
11) 「無限、宇宙および諸世界について」241-242.